

解 答

- 問一 ア 身辺 イ 首脳 ウ 結実 エ 保険 オ 貯金
 問二 イ ア 2 ウ 3 オ 4 イ 問三 オ
 問四 (例) 何もしない自分だけの自由な時間
 問五 オ 問六 ウ
 問七 (例) 当面の仕事にとらわれず、自由時間に、自分の知的関心をそそるものを探し出して育て伸ばすことを生涯の生きがいと考えること。
 問八 ア
- 問一 イ エ 2 イ 3 オ 問二 イ ウ 2 エ 3 イ 4 ア
 問三 まかふしき 問四 ア
 問五 (例) 発作を起こして苦しがっていると思った妹が元気そうな様子をしていたこと。
 問六 ア 問七 オ 問八 ウ
- △ 問一 A (例) トロッコを押すことが楽しい(という良平の心情)
 B (例) 帰路のことを考えると少し不安だ(という良平の心情)
 問二 (例) 玄関に入った。暗い夜道を一人で走ってきた良平には、玄関の灯がいつにもまして明るかった。雑然と並ぶ家族の靴や下駄に目をやった。夕餉を知らせるにおいがそこにはあった。ようやく息も気持ちも落ち着いてきた。

解 説

- 出典は、外山滋比古『ライフワークの思想』。
- 問三 「装飾効果」とは、表面的な見せかけをよくする効果のこと。知的関心が「咲いた花」「新しい流行の切り花」のほうに向けられているため借り物の知識を身につけただけだが、それでも一時的には知識があるように見せかけることができるということ。しかし、それは一時的な借り物なので、「散ってしまえばあとは何も残らない」のである。
- 問四 「自由な時間」「何もしないでボーッとする時間」「無為の時間」「自分だけの時間」などと言い換えられていることに着目する。「無為」は「何もしない」こと。「何もしないでボーッとする時間」は14字で、「十五字以内で」という条件に合いそうに見えるが、問題に「書き抜いて」とは指示されていないので、そのまま書き抜いて答えることはせずに、「何もしない……時間」という部分を生かし、「自分だけ」「自由」などの言葉を入れてまとめるこど。
- 問五 文章の中ごろに「ライフワークは、文字通り生涯の仕事であって、晩年になって初めてケツジツする」とあるのに着目する。「ケツジツ」は「結実」で作物が実を結ぶこと。つまり、人生を作物にたとえると、ライフワークが実を結ぶ晩年は、人生の「収穫期」ということになる。
- 問六 前問の解説で引用した「ライフワークは……ケツジツする」ということから、ア、ウおよびオの選択肢の前半部分が関係ありそうであるが、アの「職場での成果」、オの「芸術的な創作」は文章の内容と合っていない。自由時間を「自分の生きがいとして、人生の豊かさにつながるところで、能力の備蓄、可能性のゆとりを持つ」ようにするために使うべきだと述べていることと合うのは、ウの後半部分である。
- 問七 「球根」でたとえられていることは、直前の文にある「さまざまな花の中からみずから好むものを選び……それを自分の力で咲かせること」。このたとえを「個人の人生」にあてはめると、「ライフワーク」となるものをものを持ち、それを生涯を通して育っていくことになる。
- 問八 冒頭に書かれている「日本人はこれまで、ヨーロッパに咲いた文明の“花”を切り取って……模倣することをもって社会の進歩と考えてきた」ことを批判し、「“切り花から球根へ”という発想の切り換え」が必要なことを述べているが、それに合うのはア。文章中にしばしば出てくる「花」や「球根」はたとえであって、イのようなことを言いたいのではない。また、ウの「ヨーロッパの文明を学び、見習う」のは、まさに筆者が批判している、「切り花を飾ること」である。筆者の主張するライフワークは、エのように「仕事の中から生きがいを見つける」ことではないし、オのようなことは書かれていません。「本を読んだ後じっくりと内容を考えること」より「無為の時間」「何もしない……時間」を持つことのほうが重要である。
- 出典は、いしいしんじ『魔法のリコーダー』。
- 問三 それまでのあらすじと関連づけて考えること。少年は男から「願いがかなう魔法のリコーダー」の話を聞き、「病気の妹のためにその笛を買う決意をし」、待ち合わせをしたカフェでその男から「魔法のリコーダー」を見せられ

た場面である。「魔法のリコーダー」というからには普通のリコーダーではなく、さぞや変わったものだろうと思っていたところ、予想に反して特に変わったところもないものだったので「拍子抜けした」のである。傍線部の直後の「まかふしげな模様や呪文が刻まれた、あやしげな笛を想像していたからだ。」が理由を述べた文になっている。

問四 カフェのご主人の話に妹のことは出てこないので、アはあきらかな誤り。

問五 少年は妹がどうなっていると思って大急ぎで家へ帰ってきたのか、それが予想に反して妹は實際にはどうだったのか、ということを読み取ってまとめること。少年は、妹が発作を起こしてすごく苦しがっているという男の言葉を信じ、大金を払ってリコーダーを買い、大急ぎで家へ帰ってきたのである。ところが妹は、元気そうな「真っ赤な頬」でいちじくを食べていたのである。

問六 「背中から芯が抜かれたみたい」とは、体から急に力が抜けてヘナヘナとなってしまい、立っていられなくなる様子をたとえたものである。妹が苦しんでいるのではないかと心配でカフェから家まで全速力で走ってきたが、妹が無事と分かったとたん張りつめていた気持ちがゆるむと同時に、全力で走ってきたことによる疲労におそれ、全身から力が抜けて立っていられなくなったのである。

問七 「発作なんて起きやしなかったんだな」と「めまいをこらえてたずねた」内容から、めまいの原因を考えること。少年は男に、妹が発作を起こして苦しがっていると言われ、妹を発作の苦しみから救うため「三年かけてためたアルバイト料の半分」という大金を払ってリコーダーを買ってきてるのである。ところが、カフェに入って男に会っていた午後二時以降、妹は元気だったと聞いて、男にだまされて笛を買わされたと気づき、「めまい」がするほどのショックを受けたのである。

問八 リコーダーですばらしい音を奏でる妹の、「勝手に指が動いてくれるの」というこたえや、「もっとうまく吹けますように」と考えながら吹いているというこたえを聞いて、少年の心の中にひょっとしたら本当に魔法の笛かもしれないという気持ちが生まれてきていることを読み取る。もしそうであるなら、七回くりかえすと魔法の力が發揮されて、あの店の屋根が本当に落ちることになってしまうのを恐れたのである。

三 出典は、芥川龍之介『トロッコ』。

問一 A 明るくあざやかな感じのする情景で、主人公良平のトロッコ話押すことに対する、喜びの気持ち、楽しい気持ち、うれしい気持ちを表している。そのような気持ちは「全身でトロッコを押すようにした」という動作からも感じられる。 B 「薄ら寒い海」という言葉から受ける感じは、Aのような明るく楽しいものではなく、暗くさびしい感じである。「あまりに遠く来過ぎたことが、急にはっきりと感じられた」とあるのと合わせて、どんな気持ちか考える。

問二 不安な気持ちで遠くから帰ってきたことが想像されるが、それが無事家に着いたときにはほっと安心したことであろう。良平の安心した気持ちが感じられるような家の中の情景や、良平の行動を書くこと。